

プレス空知 2020年7月 旅するピアニスト⑨ 深井尚子

コロナ禍の中、7月になりました。大学では、まだ、オンライン授業が続いていて、対面で学生には会えないまま、夏休みに入ろうとしています。やはり、学生たちに実際に会えないのは、もどかしさを感じます。でも、もう少しの辛抱と期待しています。

今日は、私が大好きなイタリア、ヴェネツィアの旅についてお話ししましょう。バロック時代の音楽の父、J.S.バッハも、18世紀の文豪ゲーテも、とてもイタリアに憧れていました。地理的に北にあるドイツに比べて、イタリアは太陽の光がいっぱいで、明るく開放的な雰囲気、心を奪われ、バッハは、「イタリア協奏曲」を作曲していますし、ゲーテは、実際にイタリアを旅しています。当時は鉄道もなかったので大変な旅だったと思いますが、私が初めてヴェネツィアに行ったのは、鉄道でした。ヨーロッパは、陸続きなので、国境を越えて国際列車が縦横無尽に走っていますが、ウィーンからローマまで770Km、なんと直行の列車が走っています。途中430Kmのところ、ヴェネツィアがあります。とにかく、ウィーン＝ローマ間は、乗り換えなしで行けるのです。コンクールの帰りにローマの友人宅に立ち寄り、13時間のウィーンへの帰宅の列車に乗りました。列車に乗った時、自由席が結構空いているな・・・と感じつつ、2等車に乗り込み、本を読んでいるうちにすっかり眠ってしまいました。実は、イタリアのテルニでのコンクールからの帰りで、とても疲れていました。さらに一人旅でした。気がつくと、周りは海のようにちゃぷちゃぷと水の音がします。列車は止まっていて、乗っている人もいません。駅員さんが、「ここは終点ですよ。」といいます。私はびっくりして、「私はウィーンまで行くんです！！」というと、「ウィーン行きは、陸にあるヴェネツィア・メストレ駅からとっくに出發していて、この列車は、そこで切り離されて、ここ、水の都ヴェネツィアのサンタルチア駅終点に着いていたということです。さすがに、我ながら思いもよらないハプニングで、かなり慌てましたが、もう深夜0時を回っていて、次の列車は、間違いなく次の日になります。仕方なく、駅近くのホテルに1泊することになってしまいました。しかし、翌朝、ヴェネツィアの景色を見てあまりのまばゆさに感動してしまいました。水の都ヴェネツィアは、中世からルネッサンス時代に交易で栄えた海の都で、マルコ・ポーロが活躍したところです。その後19世紀には、隣国オーストリアの占領下になったため、ドイツ語が話せる人が多く、おかげで言葉の心配なく、内海を遊覧することができました。この突然目の前に現れた美しいヴェネツィアに、私も魅せられ、その後も3度、ヴェネツィアを訪れています。ヴェネツィアは、ヴェネツィアングラスが特に有名で、3度の目の訪問の際は、船でムラーノ島まで行き、ワイングラスを買いました。今も大切に使っています。コロナが終息しましたら、また、是非訪れたいところです。